



Title	「ウィリッツ」型平面と「ヒコックス」型平面の住宅について：ライトの住宅作品における多様性生成システムの研究（その1）
Author(s)	水上, 優
Citation	デザイン理論. 2017, 70, p. 98-99
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/65054">https://doi.org/10.18910/65054</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「ウィリッツ」型平面と「ヒコックス」型平面の住宅について ライトの住宅作品における多様性生成システムの研究（その1）

水上 優／兵庫県立大学

## 1. はじめに

本研究全体の目的は、建築家フランク・ロイド・ライトの思索と制作の関わり合いをそれらの変容の事態に着目しつつ明らかにすることである。制作される作品の変容の事態は、独自のダイアグラムを用いて分析される<sup>1)</sup>。分析から、初期住宅作品の居室を構成する要素の繋がりに次のような同一性が指摘される。すなわち繋がり①：「E（入口）-（Lib（書斎）， Re（応接室））-L（居間）-D（食堂）-Pa（配膳室）-K（台所）-SH（階段室）-E（入口）」、繋がり②：「L-E-D」及び繋がり③：「LD-E」。これに構成要素としての居室の「空間的連続形式」すなわち①互いの矩形平面の辺で接するもの、②連続する一つの大きな空間を志向するもの、③コーナー（隅角）部分で接して流動的な空間を志向するもの、以上を反映させることにより、ライトの住宅作品の特徴として、いくつかの「型」が仮設される（図1）。これらの型の概念の導入によって、同一型に属する個別住宅作品間の差異と同一性が型の展開として記述-分析される。また異なる型に中間的に属する作品

への注目によって、型同士のかかわり合いが記述-分析される。その全体像は或るシステムとして浮かび上がってくるであろう。本発表では、このうち繋がり①に属する「ウィリッツ」型及び「ヒコックス」型に着目し、それらの作品の差異、すなわち多様性を考察する。

## 2. 「ウィリッツ」型平面の住宅作品の多様性

「ウィリッツ」型は、LとDが室平面の隅部で接する形で連続的な空間を志向するものであり、ダイアグラムBで〈L-D〉と示される。ウォリス・コテージ（1900）の初期案はEとDが暖炉背後で繋がる変形的な「自邸」型であったが、実施案において暖炉つきLの移動に伴い〈L-D〉関係が成立。ここに最初の「ウィリッツ」型平面の住宅が実現する。「大空間のある小住宅」案（1901）はウィリッツ邸（1901）とほぼ同じ平面構成であるが、その外観は、未だ「自邸」型平面構成であるブラッドリー邸（1901）に酷似しており、両住宅の間に位置づけられる。ただし暖炉前のベンチに着目すれば、ブラッドリー邸は、それが造付けのダヴェンポート邸（1901）に近

		繋がり①				繋がり②			
		自邸型	ヒコックス型	ウィリッツ型	チャーンリー型	パートン型	ハーディ型	ロビー型	デイビッドソン型
主要平面	断面図								
ダイアグラムA									
ダイアグラムB									

図1 プレイリー・ハウスの「型」（太枠は「ヒコックス」型と「ウィリッツ」型）

い構成となる。クラーク邸案（1904）とウルマン邸案（1904）はLよりDが階段6段分低く、Lが中2階から見下ろされる立体的空間構成。細長い敷地のヒース邸（1905）はL暖炉が外壁面に配され、一方はテラス他方はD及びEに繋がるゾーンを持つ。エスベンシェイド邸案（1911）も暖炉が外壁面に接し、L-D間を衝立状壁で仕切る。サットン邸（1905）は第1案が「ウィリッツ」型、第2案が「ヒコックス」型であり、両型の中間的な平面構成で実現。グリッドレー邸（1906）はL暖炉背後でDとEが繋がるが、引込戸で遮蔽も可能。ボーイントン邸（1908）でもDはEとも繋がりがつつ天井の高い自律的な空間となる。リトル夏の家第1案（1908）ではDとEが衝立状壁で仕切られる。インガルス邸（1909）は形式的な十字形平面であるが、L-D間の天井は連続しつつ柱状照明ボックスと空中のトリムが両者を区別。ケロッグ邸案（1913）もほぼ同じ構成。シャンペイ邸案（1919）はLとDそれぞれが折上天井を持つ。ブリガム邸（1915）は矩形平面中央に暖炉を配した構成で「ヒコックス」型的な空間の一体性も併せ持つ。

### 3. 「ヒコックス」型平面の住宅作品の多様性

「ヒコックス」型はD、L、Libが一つの大きな空間を志向するものであり、ダイアグラムBに(D-L-Lib)と示される。最初期のエモンド邸、パーカー邸、ゲイル邸（1892）やウーリー邸（1893）は連続する3室間に袖壁と引込戸があり未だ1室空間ではない。デヴィン夫人邸案（1896）でも異なる平面形の3室間に小アルコーブがある。「ヒコックス」型初出はヒコックス邸（1900）並びにその鏡像的平面を持つヘンダーソン邸（1900）である。3室間に梁と袖壁があるが、前者は天井高が等しく、後者はLが若干高い。「プレーリータウンの家」案（1901）平面も同様であるが

断面パースではL吹抜け。吹抜けLはメッガー邸案（1901）及びショウ邸案（1906）にもあるが実現例はない。チェイニー邸（1903）では舟底天井で3室が連続しつつ袖壁的棚とトリムで区分され、Lはテラスと暖炉側に拡張。ウエストコット邸（1904）では平天井で3室が連続しつつ暖炉両端から天井未達の棚が伸びて3室を区分。D.マーティン邸（1904）では、平天井で3室が連続しつつ2連トリムで区分され、L平面はテラス側、他2室は3方に拡張。ジョンソン邸（1905）もトリムで3室が区分されるが、連続する天井モーディングはさらに両端外部テラスにまで伸長。アーヴィング邸（1909）は平天井で連続させ設備柱とトリムで区分。ロバーツ邸案（1909）は暖炉を中心とするT字型平面の平天井外周をモーディングが回りつつ棚とトリムで区分。ボルチ邸（1911）は、天井照明と一体的にデザインされたモーディングで平天井を区分する。アダムズ邸初期案（1912）は暖炉が偏心して配され、平天井をトリムで区分するが、D側とLib側とでトリム幅が異なる。

### 結. 両型の諸住宅の差異の意味

主室の基本構成を同じくしつつ、それぞれの型の諸住宅は多様な詳細を与えられている。それぞれ「連続敵空間」、「一体的空間」を志向しつつ、同時に各主室の区別を達成しようとする試みであると言えよう。ライトの志向する連続性（continuity）や一体性（plasticity）は「単一」「単調」「同質」を意味するものではない。かれのいう「一からの多」のあり方の一端を見ることができよう。

#### 註

- 1 ダイアグラムを用いた全体的分析は、拙稿「プレイリー・ハウスの生成システム フランク・ロイド・ライトの思索と制作」日本建築学会計画系論文集、No. 700, pp. 1449~1457, 2014.6参照。

\*本研究はJSPS科研費26420658の助成による。